

字余り人生

岡田誠三

字余り人生 岡田誠三

中央公論社

字余り人生

定価一三〇〇円

昭和五十六年十一月二十日初版印刷
昭和五十六年十一月三十日初版発行

著者 岡田誠三

発行者 高梨 茂

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二丁目一八七

振替 東京二二三四

©一九八一 校印廃止

目次

老年

定年後十三年 9

最後の絵 21

年をとるということ 26

屋敷神との対決 28

定年無念流逆手の構え 44

私の定年スピーチ 49

定年のあと 54

老いと笑い 57

字余り人生 61

若いサラリーマンの人たちへ 76

「熟年」をつくづく考える 79

夫婦

わが妻害録 84

ああ！夫婦 87

「妻の殺し方教えます」 89

世の女房族殿へ 92

夫婦対話の奨励 96

離婚式案内 97

生活

気のきかぬ機械 103

黒塗りの桐の柁目の下駄 105

わが家の電化製品観 106

本の運搬人 111

仙郷もまた住みにくからずや

わたしの金銭考 114
112

記者から読者にかえて 115

酒を飲まぬ酔っぱらい 118

花咲かじいさんの話 119

昭和元禄から昭和天保へ 121
職業的習慣になつてはならない職業 123

血縁

とりつかれた三代噺 128
父のふるさと 131

私のおやじ・おやじになつた私 134

直立猿人のよろこび 137

スーパ距離の取り方 139

絵にかいたような子ども 141

新婚の息子夫婦に与える 144

師友

紅蓮尚先生 147

街の仙人 152

二度訪れた長沖先生のお宅 156

『猿酒』の謎 158

芸能

チャップリンの二人羽織 163

小春団治と九里丸 165

東の芸・西の芸 170

私の会った人 174

表現

二つの大阪弁 183

聞く立場と聞かれる立場 185

書くこと 190

三つの詩型 196

天に近きもの 199

宗教

神の角度 202

はかない墓の話 204

スーパードット荷由来 208

天の神と確率の神 212

「かんろだい」の舞い 215

式のない葬式記 218

まぼろしの仏 222

散策

初冬の色 230

散歩道 234

塔のある広場 241

人の歩く道 244

阿修羅とクスノキ 249

石屋の村 251

奈良 257

法隆寺 261

新築薬師寺拝観記 265

宝島に宝はあったか 271

垂直旅行記 274

大阪

「大阪春秋」と「江戸っ子」
277

大阪町人雑学の精神
279

中之島倒影八景
282

島之内界限
300

大阪・兵庫風土記
307

大塩の乱の意味
320

船場の銃撃戦
323

あとがき

初出一覧

字余り人生

老年

定年後十三年

五十五歳の誕生日に定年退職して今年で十三年たった。

十三年前、行く手にどんな道がつづき、どんな風景が展開するのかわかぬもつかなかった。その後、私が日課のように散歩する自宅近くの山腹の小道が夏になるとすっかり草におおい尽されて足もとがさだかでなくなるのと似ている。試行錯誤をくりかえし、まわりの雑草を無我夢中にかきわけて、あえぎながら歩いてきて、ふと、立ちどまり、後ろをふりむくと、いつのまにか十三年の時標が立っている。これが実感である。

四十歳を少しすぎたころに一つのヤマがあるといわれる。それが人生前期のヤマだとすれば、六十のなかばをすぎるあたりに後期のヤマがあるようだ。

だけど、時間の経過そのものは私には直接、わからない。現職中のさまざまな出来事も、さながらきのうのことにように、たちまち、鮮明に浮かんでくる。内面の記憶の壁に過去は時の流れを失って、空間のオブジェのようにはりついている。

『定年後』という私の本がテレビドラマ化された放送局のスタジオの中で、私が定年になる二年前、やっとの思いで建てたささやかなマイホームの間取りと、その時点から二十数年前に私が従軍した赤道から南へ十度、東部ニューギニアの山中の戦闘司令所の幕舎とが、ものの一メートルとへだてぬ間隔で作られているのを見た。しかし、このドラマ化のためのセットの配列と、私の内面の記憶のそれとは同じである。私は頭の中でこの二つのあいだを瞬間の速さで行き来する。

ただ、時間がたったことを物語る一番、はつきりとした証拠としては、私の生体の部品のあちこちに支障が現に生じていることだろう。「目足（めあし）」といわれる。年をとると、まずはじめに目か足をやられるという意味だ。たしかにそうだと思う。

苦しい自己との格闘のすえにやっとの思いで一つの仕事をおえたある朝、雨戸をくった私の視野に映る初秋の透明な空一面に黒い斑点が散らばっているのに驚いた。それは沢山な小さい虫がチカ、チカと動いているように見え、夜の人工光線のもとでは消えるが、白昼の自然光の中では白い壁やタイルの上などにもしきりに現れる。幼い時から目に対して異常な恐怖心をいだいている私は、この黒い斑点が徐々に網膜の上にひろがり、やがて私は意識を持って生きたまま、真っ暗闇の世界におちるのではないかという、幻想をつのらせた。

何日間かかけて、病院の廊下の長い列の中で待ったすえ、信望の高い専門医の精密検査を受けた結果、目にはこれという異状のないことが確かめられた。黒い点が見えるのは生理的飛蚊症（ひょうめんしょう）だという。網膜には関係なく、自動車のフロントガラスが汚れるように、眼球のレンズの内側にススがついた状態になるものだと言明した医師は、

「まあ、あまり気にしなさんナ」と、こともなげにいった。

生体の老化にもなつて生じる生理現象の一つで、手のほどこしやうがないということだ。この国独特の人畜無害の表現を使えば、成人病の一つ、といういい方になる。

このあと、私の視野に映る外界の風景の空の部分はいつも黒点でよごれたものになるのかと思うと、心が沈んだ。でも、この程度でひとまず難をのがれたとすれば、このうえなくありがたい。そんなころ、同年代の旧友のA君がひょこりとたずねてきた。彼は興奮気味で一氣に身辺の急変についてしゃべった。定年後、損害保険の代理業務をおこなう資格を取つて二次就職をしてから数年間、懸命に働きとおしてきたのが、社内の検診で突然、ドクター・ストップをかけられたのだという。

過労のあまり肝臓が悪くなり、白内障にもかかっている。「命が惜しければ、もうこれ以上、仕事をするナ」と医師がいったそうだ。居間で対座して話す相手の、小ぶとりな丸顔には血の気がひき、両眼がうつろだった。

「マンガの本をおもしろく読んでいて、何気なくひらいた次のページが予告もなしに真っ黒に塗りつぶされている。人生のしまいがけはこんな感じがする」

その友人は精力的な奮闘型の人柄だけに、暗転したわが身をかえりみて、こんな風にいったのが私の心にささった。

たしかに、六十歳をすぎるところから私は、緩慢ではあるが、必ず執行日が来ることだけは間違

いない死刑囚のような氣持にまといつかれる日が多くなった。

A君が手土産に置いて帰ったミドリノスズが、日一日と細い茎をのぼし、一節ごとにかわいい球状の肉質の葉をつけてゆくのを眺めるのが、私の沈みがちな心をわずかに慰めてくれた。

たまに大阪へ出た帰りのターミナル駅でばったりとS君と出会ったのもそのころのことである。高校のピアノの先生である妻君がさきごろなくなつて、Sはいま、一人娘と暮らしていた。

現役中にはいつもきまつた職場の顔ぶれと、なじみの場所毎晩のように飲んだ。そのあまりにも同じことのくりかえしに、ましてつき合い酒という以上にそれほどアルコールの素地のない私は、ときにいささかうんざりする思いがしたものだ。ところが、定年に老後がかさなりあつて人生の後半が深まるにつれ、一番さびしいのは、かつての身近な友人と会つて思う存分、話し合う機会が間遠まどろになつてゆくことである。

第一、相手が一人、また一人と死んでいつて、その絶対数がへつてゆくし、健在な者同士にしても、それぞれの家庭の事情と、生きてゆくための制約に追われて、そんなにたやすくたずねあえるものではない。

まして、Sは私と劣らず、会社では、ずれの優なるもので、独自で頑固な生き方の癖を持つてゐる。組織から解放されたあと、とくに会いたくなるのはこの手の人間である。

「ちょっと話そか」

Sと私はどちらからともなくうなずきあうと、ラッシュの人ごみを足早にぬけていった。妻を亡くしてから最近、Sは現役時代より足しげく飲み回っている様子だった。

十人ほどがコの字型の台にそって並ぶと、身動きが出来なくなるスペースしかない。コの字の真中に中年ぶとりの肉感的なマダム風のおかみが立っている。彼女は後ろの棚から客の求めに応じて酒をつぎ、カラオケのマイクをバトンタッチもする。ほとんど固定した顔ぶればかりらしく、Sもその一人だ。彼がのれんをくぐってはいると、いっせいに拍手が起こって席が融通された。二、三十代がほとんどで、中年がほんのわずかまじっている中で、Sと私はおのずから長老格となる。

「大将、待ってましたデ、一つ聞かせてえナ」

だれかがそういってマイクを回した。

けれどこのメロディーは戦後艶歌の中の傑作の一つだと、何事によらず思想的意味づけを好んでするSが、長講一席をつけたあと、もし私の記憶に間違いなければ、美空ひばりの「ひとり酒」というのを歌った。やせぎすで小柄な体つきだが、声には相変らずハリがある。

現職時代につき合っていたころにはSは郷土の木遣節など、もっぱら民謡を得意としていたのが、しばらくぶりに再会してみると、すっかり戦後派ポピュラーに転じていた。老いて歌がモダン化する傾向が私にはうれしい。画家でも晩年になるほど赤い色が鮮かになるのがある。

日本の近ごろの流行歌手は口先で歌っただけで、あんなのはボーカルじゃない、まったく聞くにたえんものだと、Sはピアノストの妻君と家でしょっちゅう話しているんだとまえにいつていた。それが妻君がいなくなってから宗旨がえをしている。

やんやの拍手喝采を浴びてアンコールに応じる。ご機嫌のSはそのあと、都はるみ、山口百恵、

カーペンターズ、ベッド・ミドラーという具合に東西のポピュラーを歌いまくったあげく、明治の小学校唱歌になっているというスコットランド民謡を原語で歌ってみせた。

「あ、あのスコットランド語の民謡が出れば、よほど酔いが回ってるんだよ」

Sと隣組同士で、よく一緒につきあってきたほかの旧友が後日、私にそう教えてくれた。

Sはカラオケで歌いながら、驚くべきスピードでダブルをストレートで飲んだ。昔、そんなに深酒をしたと思えない彼がこれほど酒量をふやすようになったのは、つれあいを失ったあとの心の空洞を埋めるためだろうと私は察したとき、相手の心情のほどに共感した。

「娘いうもんはナ、岡田君よ。女房以上の女房になるもんやネ。ボクの食事の好みから何から何まで心得とって、手がとどきすぎるほど世話をやくんや……それで、実は、君、弱ってるんだよ。あいつがいつまでも嫁にいかんもんじゃから、ボクは再婚できんでいるんや」

「お目当てがあるんか？」

ここ当分、死にそうな兆候のないわが古猛妻の現存在と引きくらべて、ちょっと羨ましい気持ちになりながら、私は酔いにまぎれてからかった。

「おおありだよ、あんた。いつまでも死んでしもた奴のことをくよくよ思ってたどうなる。二十八歳のがいるが、どないや、これは？ 娘とあまり変らんが、これはちょっと無理か。やっぱし四十二のにしところかと、考えとるが……娘の奴が死んだ母親の総代理店みたいにいすわってるんで、今のところ、どうにもならん」

しきりにSはゴマ塩の頭をふっては、またしてもダブルのストレートを底までほした。